H．内分泌（甲状腺以外）

100 副腎のＲＩ診断とＣＴスキャン

石丸　紳、町田喜久雄、西川潤一、田坂　皓
（東大放射線科）

５３例の副腎シンチ検査について検討をした。アルドステロン症が疑われた２７例中手術で腺腫が確認された７例はすべてシンチ上異常を呈した。手術未施行例および経過観察例２０例中１２例は腺腫もしくは過形成がシンチ上強く疑われるが、８例はシンチ上、正常範囲内であった。臨床的にクッシング症候群が疑われた２１例中、手術で確認された腺腫１０例、過形成４例はシンチ上、明らかに異常を呈した。しかし非手術例７例のうち腺腫、過形成を強く疑われた各１例を除き５例はシンチ上正常範囲内であった。シンチ上異常を呈しＣＴ scanを行った８例のうち、手術を施行した７例（腺腫５例，かっ色細胞腫１例，脂肪肉腫＋正常副腎１例）では手術標本で長径２．９ cmの腫瘤はＣＴ scanでも発見されたが２．２ cm程度では明らかな意味づけはできなかった。副腎シンチは有用な検査であり、特に小さな腫瘤に関してはＣＴ scanより有効と思われるが、他の内科的検査などと併用しなければ副腎以外の疾患を副腎疾患と誤診するおそれがあろう。

101 副腎病変の局在診断 — 副腎シンチグラフィとX線 computed tomography の比較検討

福永仁夫，滋野長平，藤田　透，播岡敏雄，
百々義廣，中野善久．森田陸司，鳥塚莞爾
（京大，放核）

副腎病変の部位診断及び腺腫と過形成の鑑別について，^{131}I-Adosterol による副腎シンチグラフィとＧＥ CT-T による副腎部の computed tomography（CT）スキャンを行ない，その成績を比較検討した。

症例は，本態性高血圧症３例，原発性アルドステロン症（腺腫）３例，クッシング症候群（腺腫）２例，褐色細胞腫（異所性１例を含む）３例，異所性ＡＣＴＨ産生腫瘍１例，肺癌の副腎転移１例の計１３例を用いた。

原発性アルドステロン症，クッシング症候群及び肺癌の副腎転移例の部位診断には，副腎シンチグラフィ及びＣＴスキャン共に有用性が認められた。

ＣＴスキャンが威力を発揮したのは褐色細胞腫，特に副腎外に発生したものであった。他方，副腎シンチグラフィが有用であったのは，異所性ＡＣＴＨ産生腫瘍の副腎皮質過形成の症例であった。

Presented by Medical*Online